

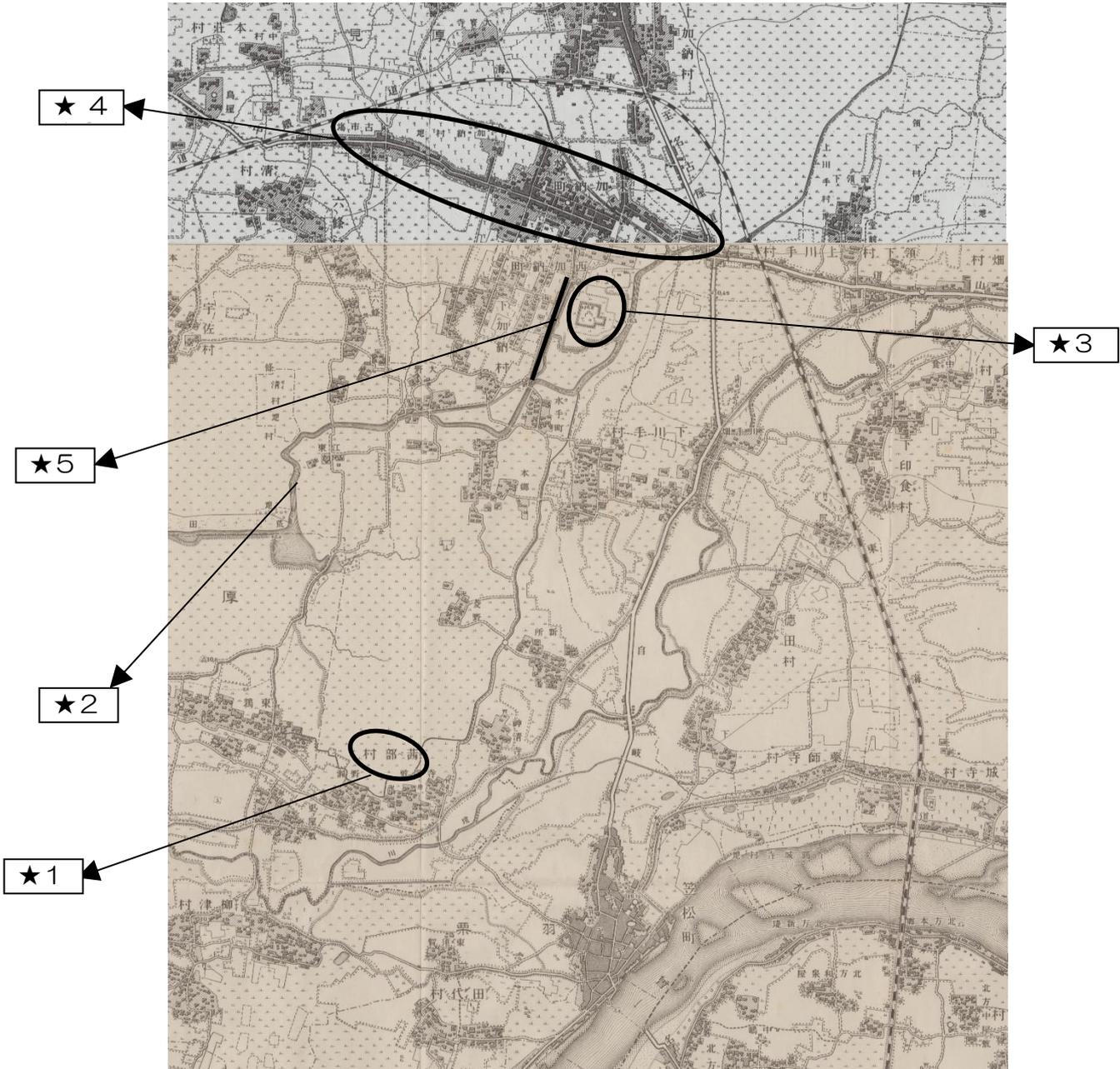
授業で使える当館所蔵地図

No. 77 『2万分の1地形図「岐阜」「笠松」明治24年測量』

作成年：「岐阜」1893（明治26）年 「笠松」1894（明治27）年

サイズ：36.5×44.5cm

作者：大日本帝國陸地測量部



【解説】

明治24年に測量された情報をもとに作成された地図。上記の地図は、「岐阜」と「笠松」の地図を重ねて表示している。この地域は、中世には菘部荘と称する東大寺の荘園であった。近世には、加納城の城下町であり、また中山道の宿場町としても栄えた。明治30（1897）年には、地図中に見られる東加納町、西加納町、下加納町が合併して加納町となり、長らく独自の街として存続した。そして、昭和15（1940）年に岐阜市と合併することとなる。信長の城下町としてのイメージが強い岐阜市であるが、上記のような歴史の痕跡を読み取ることのできる地図である。

★1 菘部の地名の由来

東大寺の荘園であった菘部荘がそのルーツである。かつては厚見荘と呼ばれ、桓武天皇の皇女であった朝原内親王が東大寺に寄進したのが始まりである。現在の岐阜市の加納、下川手の一帯がその範囲であり、長良川と木曾川に挟まれ、中央部に荒田川が流れる低湿地であり、繰り返し水害を受けてきた地域である。永仁6（1298）年2月から8月にかけて、長良川が再々反乱し水害を受けたため、地頭が東大寺に年貢の免除を願い出るが許されず、さらに六波羅探題に再々訴状を出していることが記録に残っている。

★2 荒田川

茜部荘の中央部を南西に流れ、かつては百曲川と呼ばれた。金華山、舟伏山から流れ出て、日置江にて長良川に流入する小河川である。河川勾配が緩やかなために、長良川の出水時には逆流して、しばしば氾濫する文字通りの荒川であった。その反面、荒田川はこの地域にとっては、交通上において重要な河川でもあった。

右の平成30年発行の『1:25000 地形図「岐阜」』と比べてみると、現在では荒田川の流路が蛇行せずに直線になっていることや、本来の本流よりも川幅の太い新荒田川が南北に走っているという違いを読み取ることができる。新荒田川については、放水路として開削され、昭和8年に完工している。これらの工事によって、この地域の洪水は著しく減少した。

★3 加納城

徳川家康は関ヶ原の戦いの後に、中山道の要路であり東海道への通路にあたる加納を城地とすることを決め、岐阜城を廃して石垣や建物などを移築し加納城が築かれた。本多忠勝を奉行にしたり、長篠の戦いで抜群の戦功を立て、娘を嫁がせている譜代の奥平信昌を初代の加納城主に封じたりするなど、この地を重要視したことがわかる。

城跡には現在石垣が残り、城址公園として地域の人たちの憩いの場となっている。

★4 中山道「加納宿」 ★5 長刀堀

城下町と宿場町の重層構造の都市は、中山道では三つしかなく珍しい。地図中の東海道鉄道を横切って東西に走るのが中山道であり、東加納町の集落が加納宿である。東海道にも近く、岐阜街道によって岐阜と名古屋にも接し、鏡島湊から長良川の水運も利用できる交通の要所であった。

★5 長刀堀

加納藩は洪水常襲地帯であったため、藩の財政は厳しく、藩財政打開策の一つとして、下級武士たちの生計を助けるため和傘生産が始められ、それが現在に至るまで加納を代表する生産品となっている。生産された和傘は、加納城の長刀堀より荒田川を下り、長良川の大野湊や鏡島湊より桑名を経て江戸に海上輸送された。水主町の地名が加納城南に見られるが、この和傘の水運にたずさわった船頭たちが集住した町である。

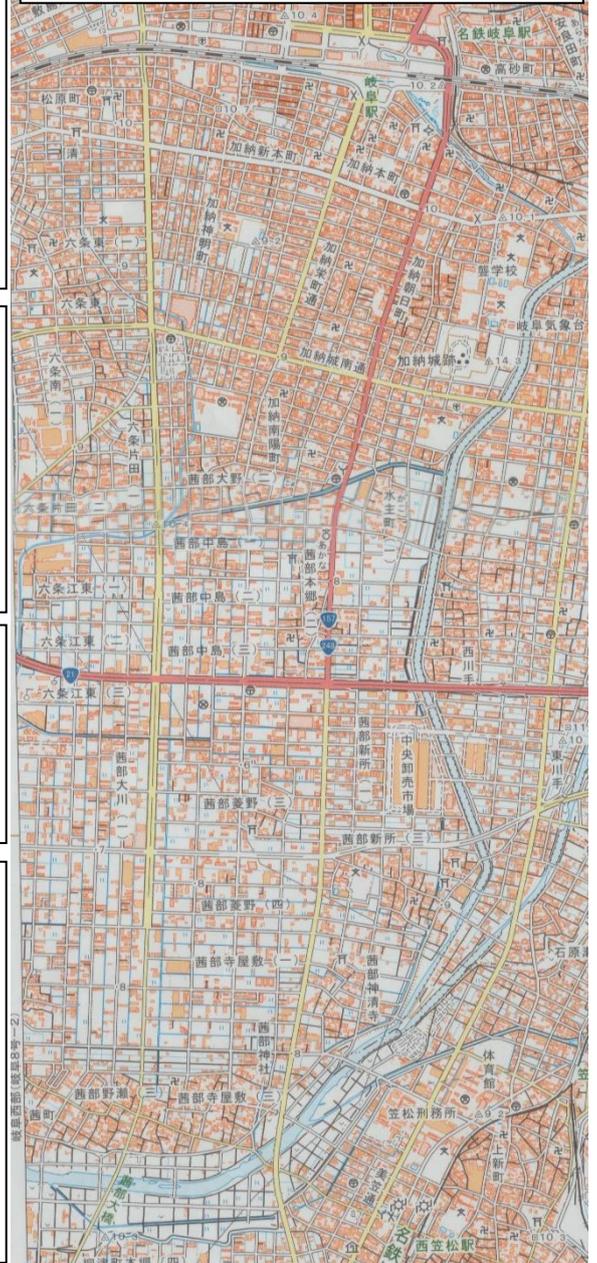
この長刀堀は現在埋め立てられており、現行の地形図では見ることができない。長刀堀という地名と水主町という地名は残っているが、かつての面影は今では全く見られない。

『1:25000 地形図「岐阜」(平成30年)』

作成年：平成30年

サイズ：41.5×51cm

発行者 国土地理院



【用語について】

・中山道

五街道のひとつ。江戸日本橋から板橋へ出て、上野・信濃・美濃などを経て、近江の草津で東海道に合流し、京都に至る。

【利用の例】

○岐阜市の市街地のかつての中心地を知ることができる

→地理的分野の「地域調査の手法」において、新旧の地図を比較し、岐阜町と加納町の二つの中心地があったことに気付くことができる。

○防災についての意識を高めることができる

→新旧の地図と過去の浸水実績と比較すると、かつての荒田川の流域では近年でも浸水していることに気付くことができる。歴史から自分たちの住む地域の自然災害の可能性を学ぼうとする認識を育てる。

(参考文献) 伊藤安男 編著 『地図で読む岐阜-飛山濃水の風土』 古今書院、1999